

合した偉大な威力に打たれると同時に、今日までの学者達の書いた歴史が、一々皆改訂されねばならぬものであることを思はない訳には行かない。多くの歴史は時の権力者を中心として書かれたものだからである。それは流れてゐる水の底を見ないで水面の波浪のみを見たものである。波浪が立てば立つほど底は見えなくなるのである。

かう考へて自分で独自の歴史を書いて見たいと発憤した。併し不幸にして私には充分の健康がない。其上に生活のために大部分の時間を奪はれる。どう考へても今私の目ざしてゐる研究を私の一生に成就することは出来さうでない。そして成るべく労力の経済を計つて、できるだけ前進することを心がけることに決心した。今度『ディナミック』を休刊するのもそれが、一理由をなしてゐる。

満五箇年の変遷を顧みると世間も自分も様々に動いてゐる。この小さな『ディナミック』を顧みても多少の感慨を禁じ得ない。たゞ永遠性を把握した歴史、宇宙性を持った歴史、民衆の中に根を持つてゐる社会生活の真実の歴史、さうしたものを創作して見たいといふ念願が私の一切を決定するのである。かうした歴史は決して今の世に公けに出来ないものであるだらう。私は何時も永遠を思ふが故に、時間を限つた成業を願はない。

(第五十九号 昭和九年十月一日)

こうして私は『ディナミック』の発行を止めた。そして東洋文化史の研究に没頭することになった。

二十六 研究生生活

東洋文化史の研究に没頭するつもりで感激を以て中国から帰ってきた私は、さて日本に帰ってみると俗用が多くて研究などに没頭してはいられなかつた。しかし日本や中国の学者達の書いたものを見て、修正すべき点が多く存する事だけは発見した。

この頃、即ち昭和十年、私は斎藤昌三氏の書物展望社から随想集『不盡想望』を出した。この書は当時三、四年間の間に諸紙に発表したものの中から選んだもので、巻頭にはカーペンターの青年時代の作である水彩画をかかげた。翁自筆の絵はこれが唯一のもので、まことに尊い形見である。『不盡想望』という書名について私は序文で次のように書いてゐる。

『不盡想望』はこれを「盡きぬ想望」と読んでも、「想望を盡さず」と読んでも、よろしからう。けれども此書名本来の意味は別にある。それは「石川や浜の真砂はつきるとも世に泥棒の種はつき

まじ」といふ同姓五右衛門君の歌と称せられるものから採られたのである。

一九一三年三月、私は日本を脱走して白耳義ブルツセル市に仮居した。それから毎月『萬朝報』に通信を送る約束ができた。けれども当時政府の断圧が厳しいので、私の本名では紙上に掲載することは出来なかつた。そこで当時の編輯長たりし斯波貞吉君に、どんな変名でもつけてくれるやうに頼んだ。斯波君の扱んだ名が即ちこの「不盡」であつた。そして、その由来を尋ねると前記五右衛門君の歌から取つたといふ。

数年前、大阪市の石川何某といふ人から、「日本には石川姓を名乗る名士が沢山にあるやうだから、全日本の石川名簿を編纂したい」とて、大規模の印刷物と記入用紙とを送つて来た。私も名士の一人にされた訳だ。そこでその用紙の祖先血統欄(?)に私は「石川五右衛門の落胤」と書いて送つた。伝説の五右衛門君はその子とともに釜うでになつたのだから、今日までその血族が残つてゐる筈がない。あるとすれば、それは落胤に外ならないからである。殊に落胤とあれば、抗議を申出るものもあるまいし、私の思想系統(世の中から悪まれる程度から見ても)から言つても五右衛門君の落胤ぐらゐのところに着きさうに思はれる。「世にアナキストの種は盡きまじ」といふ意で斯波君が命名してくれたのか、どうか、其点は明白でないが、兎に角、五右衛門の落胤といふことで、効果は百パーセントだ。

これで、この書名の意味が大よそ分つたであらう。

こうして道草しつつの私の歴史研究は遅々としてはかどらなかつたが、同志三浦精一、原田理一、原田道治君等の共同研究に援けられてもかく昭和十二年には『東洋古代文化史談』として研究の一部を前記の書物展望社から出版する事が出来た。その時の序文に私は次のように書いてゐる。

私は東洋史に就いては全くの素人だ。実は素人なればこそ、この研究が思ひ立てられたのだ。東洋の日本人として、その同胞の経て来た世界と道程と、それが生んだ文化とに就いて様々な疑問が懐かれ、それと最も関係の深い支那民族及びその文化に就いて、また私の未知の世界の涯知れぬ広さを眺め見て私は驚かされた。

[……]

私の考へでは、大きな意味に於ける東洋文化の綜合統一的發展は、支那唐代に至つて一先づその最高峰に達したと言へる。それ以後現代までの東洋文化史は寧ろ停滞或は頹廢の歴史であつた。茲に東洋史上に於ける日本の使命と位置が問題になるが、それは寧ろ未来のことに属するであらう。故に東洋文化を研究する以上、どうしても唐時代にまで到達しないと本論に入つたといふことにはならない。私も目標だけは、そこに定めてあるが、私の健康と寿命は恐らく私の希望を容れないであらう。また仮令健康と寿命とがあつても、無力にして無一物な私は、研究資料を手に入れることも、またそれに接する手段をも得られないであらう。切齒扼腕するとも、こればかりは及ばない。

[……]

ところが、この書物の発行が機縁となつて親友逸見山陽堂主人、逸見斧吉君に頼まれ、私は同店の青年達に東洋文化史の講演を行うことになった。私は講義であるゆえ、つとめて簡易平明ならんことに意を注いだ。が、事実が極めて広大、複雑、多岐なるために、それは仲々の骨折であつた。しかしまた、平易を希望しつつも、決して卑俗に陥らないことを念としたため、そこに一層の苦心を必要とした。こんな風にして私の東洋文化史の研究はすめられたのである。これ、『東洋文化史百講』と題してその第一巻が、昭和十四年に育成社から発行された。この書の第十八講老子伝、第十九講孔子伝の一部を左に掲げておく。

第十八講 老子伝

〔……〕

老子の思想が支那民族の精神生活に影響したことは到底儒教なぞの及ぶところではありません。孔子の思想は人間を器械的に利用する手段として用ひられ、人間生活の表面的形式に重点を置く傾向を持つのであるが、老子の思想は寧ろ形式を解脱して自由と平和とを得せしめようとする。孔子は政治的であるが老子は哲学的であります。孔子は国家主義的であるが、老子は個人主義的であります。兩者とも社会的調和生活を説きながら、實際的態度は対蹠的なのであります。

〔……〕

支那の威力はその「后土」にあります。支那四千年の歴史を支配する偉大な文化力は「井を鑿りて飲み、田を畔して食ふ、帝力我に何かあらんや」といふ精神にあります。この精神を宇宙観、人生觀にまで精成し、悟道の法悦にまで純化したのは実に老子であり、そしてその哲学の基礎を后土の深底から築き上げたのが老子であります。「上善は水の若し、水は善く万物を利して而して争はず」「古の道を執つて以て今の有を御す。能く古始を知る。これを道紀と謂ふ」「功成り事遂げて、百姓我を自然と曰ふ」「天地相合ひ、以て甘露を降す。人之をせしむる莫くして而して自ら均し」「天下道あれば走馬を却けて、以て糞す（耕作に用ひる）。天下道なければ、戎馬郊に生ず」「民飢うるは、其上、税を食むこと多きを以て、是を以て飢うるなり」「天の道は争はずして而して善く勝ち、言はずして而して善く応じ、召ずして而して自ら来り、坦然として而して善く謀る。天網恢恢、疎なれども失はず」「弱の強に勝ち柔の剛に勝つ、天下知らざる莫きも、能く行ふなし」

凡そこれ等の諸句は皆無為自然の道を説いたものであります。古の道といひ、古始を知るといひ、天地相合ひ甘露を降すといひ、争はずして勝つといひ、弱能く強に勝つといふ。凡そこれは海洋の如き広い心持でなければ為し得ないところであります。「江海の能く百谷の王なる所以は、その善く之に下るを以ての故に、能く百谷の王たり」といふ心境こそ之れを能く言表してゐるのであります。それは実に政治否定、国家否定の宇宙大道の宣揚であります。そしてこの精神こそ、彼の世界無比の長い歴史と広大な地域とを持った大文化を成し來つた所以であります。

老荘の学は神農学とも呼ばれるが、それは実に「后土」の自然力に全幅の信仰を捧げて、「帝力我

に何かあらんや」と歌ふところの神農的精神が老荘の古始道、抱朴教と一致する故でありませう。伏羲や神農が象徴化する平和な文化と黄帝や周朝の伝へた武力文化とが対蹠的のものであることは繰返して述べましたが、周公を理想とした孔子は支配階級から信用せられ文宣王と号せられて政治の標識とされて来ました。老子の思想は水の如く空気の如く支那全民衆の中に浸潜して全支那を育み且つ支配してゐるのであります。

第十九講 孔子伝

〔……〕

孔子といふ人物は一面から見ると凡俗ではありましたが、時代と合せ考へると、そこに彼の歴史的価値の重大なことが発見されます。それは政治家と教育家との分業を実現したことが一つ、理論と実際との分離を齎らしたことが一つであります。歴史上に於て、師道といふものゝ最初の実現を彼自ら担当したことが一つであります。孔子は政治家として失敗したが、理想を持つた教育家としては先づ成功者と言つてよい。「弟子三千焉、身六芸に通ずる者七十有二人」と言はれ、数の上から見て、当時の世界にては非常な成功とも見られるのです。然し彼の成功は三千人の弟子を持ち、当世に用ゐられた幾人かの官僚を養成したといふに止り、新時代の新人を造つて時代を指導させるといふほどのことはありませんでした。この点から見れば、彼は、教育家としてわが国明治時代の福沢諭吉や新島襄に及ばざること違ひのであります。それは彼の思想が、治国平天下を目標として、

周の社会を理想とし、周公を理想的人物としたもので、一種の保守主義であつた為でもあるが、彼に時代の趨勢を直観する敏感と人類に対する熱愛とを欠いたことが、その最大の原因となつたでありませう。「周は二代（夏殷の二代）に覽みると都々乎として文なる哉。吾は周に従はん」といひ、また、「甚矣、吾衰也。久矣、吾不復夢見周公也」と彼は言ひ、その回顧的且復古的思想が明示されてゐます。そのみではない。周の王朝が武力的征服を以て成立し、擄取者の偽善的階級道徳を以て建国の精神としたものであることを考へ合せたら、それを理想とする孔子の教育が決して創造的でも進歩的でもあり得なかつたことは寧ろ当然であると言へませう。彼は東洋に於ける最初の官僚主義、階級的奴隸主義の教育者として、不磨の足跡を歴史上に遺したのであります。

孔子の教育そのものは、それ故に大した創造的功績を遺してはゐないが、孔子の事業が時の政治的権勢の外に立ち、政治組織と離れて行はれたといふ点が、歴史上に重要な一現象と見られるのであります。それは彼として已を得ずして到達したことであるが、而もかうした事業に先鞭を付けたといふ点こそ、後世をして彼を聖人と呼ばしめ、彼の名を国家統制の手段として用ゐしめるに至つたのであります。勿論彼の思想そのものが単なる常識であり、保守官僚主義的であり階級的であつて、国家統制上最も便利であつたことが彼を流行児たらしめた最大原因ではありますが、後の孟子や荀子が彼を理想化し聖人と見なしたのは、彼が彼等に先駆して所謂師道といふものを樹立した為でありませう。そして後の人々は自分の志を述べる方便として、彼の名を聖化し利用したのでありませう。

〔……〕

徳富蘇峰氏はこれを左の如く評している。

〔……〕

本書中には老子、釈迦、孔夫子などの大立者が登場する。老子の出所に関する著者の所説は、未だ定論とする能はざるも、一説として参稽の価値はある。〔……〕

但だ著者は余りに老子に傾倒し、孔子をば軽視してゐる。著者は孔子に対しては、殆んど同情らしきものを持つてゐない。勿論孔子の歴史的価値は認識してゐるが、孔子其人に就ては、寧ろ頗る嫌らぬ語氣を漏らしてゐる。〔……〕

斯くコキ下ろされては、孔夫子も横を向くの他はあるまい。〔……〕

この第一巻発行以後毎年一冊ずつ発行の予定であつたが、原稿の整理に意外にひま取り、二巻を世に送つたのは、それから三年後の昭和十七年になつてしまつた。この年にはまた、第一巻の再版を出すことが出来た。

その間、私は旧友褚民誼君と二十七、八年ぶりの対面をすることが出来た、それは昭和十五年の六月のことだつた。同君は当時南京政府の外交部長をつとめ、皇紀二千六百年記念の競技大会の名譽副

会長、中国選手団団長として来日した。

褚君が答礼副使として来て居られた時は、私のような人間が近づいては或いは使責に支障を与えるようにならぬとも限らないので遠慮していたが、選手団団長と改まつた以上は、せめて名刺だけでも呈して敬意を表しておこうと帝國ホテルに行つた。

ところが、折よく不在であつたので、予定の如く名刺を置いて帰つてきた。旧知としての責務を果たしたという心の軽さを感じながら。それはたしか六月六日だつたと思う。然るに、その翌日私は褚君から「速達」を受取つた。「同志よ、君が東京にいると聞いて、僕は甚だ幸福だ。明朝九時に来てくれまいか」というのだ。こうして二十七、八年ぶりで相会して「白髪が生えたね」「大分はげたね」と、あらを示し合つて久瀾を叙した。

その翌朝も私は八時前にホテルに行つて朝食を共にしながら語り合つた。しかしそれでも訪客が詰めかけるので落着いてはいられなかつた。

公の行事の隙間をねらつて私は彼を上野博物館に、浅草公園に、それからボンボン蒸気船で永代まで案内し、また渋谷と浅草の間を地下鉄に乗せ、或る時は若柳派の中村千世舞踊研究所で上流家庭のお嬢さん達のお稽古を見せ、それから友人逸見斧吉君の家庭に於ける茶の湯、懐席晩餐に同伴し、最後の九日の夜はちょうど宝生の月並能があつたので、ここに招待した。

浅草観音堂で田舎者相手の観音像を大まい五円だして有難そうに買いこんだ褚民誼君は茶の湯には頗る感激したと見え、懐席が終了すると、一葉の色紙を請い求め、茶をたてた少女（永子）のために

「一片氷心在玉壺」と書いて与えた。

さて、いよいよ彼が南京に発つ最後の夜、私は彼に言った。「君はまだ日本の真の姿を殆んど見ていない。ミニストルなんて商売は禍なるかな！ 出なおして、おいで！」彼曰く、「若い者を沢山送って研究させるよ」。やはり彼は政治家だ。医学博士の彼、医者としては藪井竹庵さんだが、政治家としては相当なものだ、と私は感じた。

それから間もなく褚君は駐日大使に任ぜられた。その翌年の三月末から五月にかけて私は彼の招きで、上海、南京へ旅行した。

私は十年ぶりで上海を見た。私が一カ月ほど毎日六時間乃至八時間ずつ講義した江湾の労働大学は、上海事変の折に全部破壊され、その近所にあった、そして私も一回講演した立達大学も跡形もなく破壊されて了っていた。しかし、あの時分私の講義を熱心に聴いてくれた青年達は、大てい蒋介石一派の反動政策の犠牲になって、それよりも前に殺されてしまったのだ。

しかし、それにもかかわらず、上海は逞しい勢いで伸張していると私は見た。今では戦乱のために少々傷ついているに相違ないが、しかし素晴らしい底力が波打っている。毎日喧騒を極めたガーデン・ブリッジ北方の呉淞路から北四川路に行く街の辺りに、行倒れの死体が二つや三つ横たわっていないことはないが、街に奔走する民衆はそれに一顧も与えず踏み越えて行く。これこそ真の生活戦場だと凄愴の感に戦慄さえするほどである。日本から各宗の宗教家も数多く来ている筈だが、そして是等の行倒れ死体は日本の管理圏内にのみ多いが、彼等坊主共は一体何をしているのかと憤慨もされる。だ

が権力におもねること以外に為すことを知らない日本の宗教家に対して、これは少々野暮な要求に違いない。彼等自身があの行倒れの屍と同様の代物で、上海はあれをも乗越えて進撃しているのだ。実はあの惨憺たる行倒れ死体そのものまでが上海のものすごい底力を象徴する如く感じられるのも不思議である。

私は船で揚子江口を廻る時も、また上海から太平洋に出る時も、褚民誼君と上海の将来についていろいろと語り合った。この上海はかつて欧州文化、地中海文化の黎明期においてアレキサンドリアが担ったような使命を未来の太平洋文化に対して負うであろうと。そして、その太平洋文化こそ、これから発展して来る世界文化の主潮をなすのであろう。ギリシャ文化の継承者としてのアレキサンドリアが、その見事な図書館を持ち、世界の哲学者、宗教家が集い来たように、上海にもまたその設備が無くてはなるまい。この十里四方の平野に理想的の文化都市計画を建て、往昔のアレキサンドリアが持った如き世界第一の図書館を設置し、礼を厚くして世界の善知識を招聘し、そして、大アジアの宝庫を開発し、太平洋の海の幸を確保し、文字通り太平洋を平和の海と化して、ここに新世界の新文化を醸成することが吾々の責任ではないか。それは決して武力では出来ないことである。武力は後方の護衛的地位に立たねばならぬ。でなければ精神文化は前進しない。東亜新秩序などと大言壮語しても、そこに哲学的根拠も科学的論拠も見当らない有様であったら、それは全然無力な空念仏として消えるであろう、と。

上海、南京の旅から帰って間もない昭和十六年九月に、私は『時の自画像』という随想集を出版

した。これは川合仁君の『日本学芸新聞』その他の諸紙に求めらるるままに執筆したのをまとめたものであったが、敏感になっていた当局により発売禁止を命ぜられた。

この書物の中から当時の私の時世への感想、批評を二、三引用してみよう。まず序文に次のように書いている。

『時の自画像』は御覧の通り小冊子ではあるが、著者にとつては最近の思想的自画像の如く見られぬこともない。元よりかういふ時世のことなれば、奥歯にもの挟まつた声であり言葉であるが、併し余り遠慮がちの表情にもなつてはゐない。物に触れ、時に感じたことを、心友に語る如く述べたものであるから、或は一般の読者には興味も薄いかも知れない。新しく建設した大陸の如く逞しくはなからうが、この時勢にもいぢけては居られないことが察せられよう。満坐のものが酔ばらつたからとて、酒を吞まずに酔ふわけには行かまい。況んや正気で酔つたふりなぞはできない。〔…〕

涙の万歳

徳富蘆花は、日露戦争当時に「勝利の悲哀」を講演して青年学徒に深刻な感動を与へた。勝利といふことは、どんな勝利でも悲哀であるべき筈なのだが、さて実際には勝利ほど愉快なことはない。相手を倒さねば勝てないやうな勝利がなんで愉快なのだらう？ 他を殺すことがなんで名譽の

戦争なのだらう？ それは味方を救ふといふ第一義の意味が含まれてゐるからだ。日本人が西洋人よりも少し深みを持つてゐるらしく見えるのは、勝利を喜びながら涙を流す一点にある。

他を倒さねば、他を殺さねば勝てないやうな戦争をせねばならない。それは何としても悲しい運命ではないか。その悲しい運命を負うて勝つといふことは一層痛ましい役割ではないか。万歳を叫びながら眼に涙を湛へる本能作用こそ、真理を語る日本人の特長だといふことは出来ないか。日本人自らはそれを無意識にしてゐる。自らすることを覚らずにゐる。そして好戦国民として世界中の憎まれものになつてゐる。〔…〕

私も小さな生命を持つて自分の戦を戦つてゐる。併し私の戦争には最後の勝利といふことは無い。無限の時間の中に石火の如き一瞬の生命を以てする戦争に、最後の勝利は無い筈だ。戦ひの中に死ぬことのみが勝利なのである。

この戦に於ては倒さねばならぬ敵はない。この戦に於ては味方と思ふ中にも敵がある。吾々の戦争は総ての人類を生かすための戦争だからである。吾々の戦争は、悲しい運命を荷うて毎年毎日の世に生れて来る憐むべき人類をして、たとへ一瞬たりとも、まことの生活を生かすためだけの戦でなくてはならぬ。

吾々の戦争には敗北もなければ勝利もない。否、敗北と思はれる時はそこに必ず勝利がある。勝利と思はれる時に却て敗北がある。レーニンが社会主義を葬つたやうに。

哀調を湛へた日本人は勝利にも必ず悲哀を感じる。万歳にもまた涙がある。この哀感とこの涙と

に光明の窓を開いてやることこそ、日本人を生かす唯一の路ではないか。

〔日本学芸新聞〕昭和十四年十二月十日

潮の干満

潮にも満干がある。その満干にも大きなのと小さなとがある。満にも段階があり干にも大小がある。それと同じやうな潮の満干が人間の社会にもある。

私が世の中に出て、人様の中で仕事を始めてから経験する干潮は今度の反動を以て第三回とする。今度の干潮はやや世界的であつて、その勢力も頗る強大である。今まで潮水を湛へて天に滔する形勢を示してゐたものが、一朝干潮時が到来すると、水は静かに引き去つて、あとかたも無い曠野が眼前に展開する。

今日は吾々にとつて汐干狩の季節なのだ。大満潮を待つ間の蟹とり、蛤ほりを享楽すべき好季節だ。この前の大干潮は今日ほど広くはなかつたであろうが、もつと深刻であつた。息づまるほどの周囲の圧迫感の中に蟄居せねばならなかつた。今度は時勢が變つてゐる。

だが併し今度の干潮は少し長からう。余り遠く潮が引き去つたので、寂しさはある。この頃不思議なことに、従来私とは反対側に立つてゐた諸団体宛の外国新聞雑誌が私のところに転送されて来る。受取人が無いからだ。更に不思議なのは神田三崎町のキングスレー・ホール宛の郵便物まで私のところに配達される。勿論関係の無い訳でないから有難く拝受して置く。ところが従来私のとこ

ろに送られてきた月刊、週刊諸紙の配達が、この頃ピタリと止められた。みな時の潮加減の致すところとは思ふが、そして差引勘定はしてゐるが、いささか寂しからざるを得ない。



併し、日本といふ国を愛せず居られない私にとつては、もつと寂しいことがある。もつと大きな不安がある。といふのは「日本精神」の宣揚といふことが流行になつて、却てそれを亡ぼしつつあるやうに思はれるのが一つ。今度世界的に押寄せてくるであらう大満潮の時を如何にするかが一つ。私はこれを憂へる。曾てクロボトキンが言つた、「世界の人々がみな社会主義者と称するに至つて、社会主義は亡びた」。この語はわが日本精神に就ても言はれないであらうか。

季節的に大満潮は押寄せてくる。満潮時にはまた颱風がくるものだ。颱風が満潮を煽りたてゝ大津波となつてこの島国を襲うた時、この国の防波堤は何処にある。

私の憂ひが、若し杞憂に終つてくれれば勿論幸ひだが。〔日本学芸新聞〕昭和十四年三月五日

『時の自画像』が発禁になつてから、私の身辺益々軍閥反動的政治の圧迫が厳しく感じられ始めた。この年の末に『古事記神話の新研究』の改訂増補第十二版の印刷に取りかかり、組版まで出来上つたのであるが、軍閥当局の忌むところとなつて、闇から闇に葬られてしまった。この初版は私がヨーロッパ放浪の旅から帰つたその翌年、大正十年の四月に出版された。私は巻頭に次の如き一句をかか

げ、同本を恩人ポール・ルクリュ夫妻に捧げた。

MES CHERS AMIS

MADAME ET MONSIEUR

PAUL RECLUS

EN TÉMOIGNAGE

D'AFFECTUEUSE RECONNAISSANCE

なお序文に次のように書いている。

「……」一九一九年十二月、私は旧友ポオル・ルクリユ氏と共に同氏夫人マルゲリト氏の病を療養する為に、三人にて仏国を出発し、モロッコ国の旧都マラケシ市（モロッコ市とも称せらる）に着いた。寄寓せし家は、ポオル氏令弟アンドレ・ルクリユ氏の宅であつた。宗教史の権威エリイ・ルクリユを父とし、地理学の泰斗エリゼ・ルクリユを叔父とするアンドレ氏は、矢張りコウした種類の夥しい図書を蔵有して居た。私は此家に七ヶ月間滞在して、可なりに多くの読書の時間と、研究の便宜とを得た。忽然として私の注意がメソポタミヤに傾けられたのも此時であつた。従来久しく懐抱したる古事記神話の疑問に対して、雷光ライカウの如き明光が投げられたのも此時であつた。「……」

こうして初版が発行されてから三十年余、私は片時も古事記の研究を怠つた事はなかつた。

それから、しばしば増補改訂を施し、第十版までは四六判であつたが、第十一版に至り全部組みかえて菊判となし、内容も初版に比すれば二倍にもなった。戦後更にこの書物を増補改訂し、その十二版を出したが、この書物で私は、古事記の神話とカルデヤの神話とキリスト教神話とを比較研究し、その三創世紀の起源が同一であることを論証した。なお第十二版の序文で次のように書いている。

「……」第一章の「勝」民族の雄姿、及び第二章天孫と近親なる氏族と月氏族と塞種の二章を加へたのである。

この増補せられた二簡章は、「……」著者にとつては極めて珍重な発見であつて、数年来、脳裡に愛蔵してきた宝物なのである。これに因て、「カチ」民族がチベット西北方の「カチ高地」より或は西に、或は東に、或は南に雄飛した聖跡を漸く明示することができ、また「ヤマト」とは山人即ち天孫の意であることまで略ぼ解つて来たのである。更にインドの阿育王も、唐朝の李氏も、隋朝の楊氏も、釈迦自身さへも、みな「カチ」族と近親の関係にあることが幽かに想像されるに至つたのである。「……」

私においては歴史も一種の創造の芸術である。事実即した芸術である。科学的芸術である。私は私の発見した原始的史実によって新しい歴史を書けばよろしい。そういう考えで私は今までも、またこれからも歴史を研究したいと考えている。丁度画家が自然の中から美をスケッチするように。